

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月24日現在

機関番号：33917

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520158

研究課題名（和文） グレゴリオ聖歌の典礼神学的研究—祈りの芸術への新たなアプローチの試み

研究課題名（英文） Liturgical-theological Research in Gregorian Chant: An New Approach to the Art of Prayer

研究代表者

西脇 純 (NISHIWAKI JUN)

南山大学・人文学部・教授

研究者番号：60329753

研究成果の概要（和文）：従来のグレゴリオ聖歌研究は、ネウマ譜の解読と解釈を主眼とするセミオロジー（古楽譜記号解読解釈学）を中心に進められてきた。本研究では、その成果に学びつつ、グレゴリオ聖歌の成立期でもある中世初期の典礼観の一端を明らかにするとともに、聖歌テキストの典礼神学的な読解の試みを通して、典礼聖歌としてのグレゴリオ聖歌の特徴の理解に努めた。

研究成果の概要（英文）：Until now most studies on Gregorian Chant concentrate on the interpretation of “neumata”, the old musical notes in the chant codices. This study takes a new approach to understanding the Roman Chant. We try to clarify the medieval view of liturgy in which Gregorian Chant was formed and performed. An effort is also made to interpret, liturgically and theologically, the text of the Chant, most of which is taken from the Bible.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
2012年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	2,900,000	870,000	3,770,000

研究分野：西方典礼史

科研費の分科・細目：芸術学・芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：グレゴリオ聖歌

1. 研究開始当初の背景

第二ヴァチカン公会議の公文書『典礼憲章』（1963年）は、112条において聖歌を「ことばと結びれて荘厳な典礼の一部をなす」主要構成要素と位置づけ、「ローマ典礼に固有な歌」であるグレゴリオ聖歌を、「典礼行為において、他の点からは差異がないものとするれば首位を占めるべきものである」と規定した（同116条）。同時に『典礼憲章』は、グレゴリオ聖歌復興運動が実際の典礼におけ

る礼拝の営みとなって結実することを願い、続く117条でさらに「グレゴリオ聖歌の諸書の規範版の完成」、すなわち、ピウス10世教皇の委託により編集公刊されたいわゆるヴァチカン版（Editio Vaticana, 1905-1923年）を越える、新たな批判版の出版を要請した。

第二ヴァチカン公会議のこうした実践的要請に応えるため、その後のグレゴリオ聖歌研究は従来の古写本のパレオグラフィッ

クな研究をさらに推し進め、セミオロジックな手法も取り入れつつ、グレゴリオ聖歌の最盛期（古写本の登場以前の9世紀頃と推定されている）の演奏に近づく努力を積み上げてきている。『Graduale Triplex』（1979年）や『Offertoriale Triplex』（1985年）などの批判版、さらには規範版たることを目指して刊行された『Graduale Novum』（2011年、本研究課題の申請後に刊行された）などの聖歌集はその成果の一端といえる。

ヴァティカン版の四角符譜の上段と下段に2系統の重要写本群からのネウマを付すこれらの批判版聖歌集は、ネウマからさまざまな音楽的ニュアンスを読み取ることができるため、聖歌演奏の質を飛躍的に向上させた。

と同時に、Triplexの登場によって演奏者は、ネウマが付されたテキスト、すなわち聖書テキストに一層の関心を傾けることになった。グレゴリオ聖歌のテキストは他ならぬ聖書であり、キリスト教では聖書は「神の啓示の書」と受け止められている。典礼において聖書は「神のことば」が今ここに響くものとして朗読され、また歌われる。したがって、典礼における聖書テキストの使用は、かかるキリスト教的聖書理解の前提に立ったうえでの宗教行為にほかならない。

ドイツを代表するグレゴリオ聖歌学者Godehard Joppichの研究は、グレゴリオ聖歌の最盛期の演奏者、すなわちカロリング・ルネサンス期以降の修道士・修道女たちが、このような意識に基づいて聖歌歌唱にあたったことを明らかにしようとした。それによると、詩編150編をはじめとする聖歌の共唱テキストそのものは旋法を含めすべて諳んじていた演奏家たち（修道士・修道女ら）にとって、ネウマは単なる旋律線の備忘のための記号ではなく、神のことばである聖歌テキストの一語一語を、典礼という神臨在の場でいかにふさわしく響かせるか、そのための、いわば修辞学的な補助記号だった。彼らにとって聖歌演奏とは、語りかける神を今ここに現在させ、この現臨者との交流をはかる典礼行為にほかならず、こうした祈りの芸術が正しく伝承されることを願って、聖歌テキストにネウマを付したのである。

グレゴリオ聖歌のネウマが近代的な意味での「音符」ではなく、テキストに従属する「テキスト解釈の記号」であったという認識は、聖歌研究者に新たな関心を引き起こしている。それは、グレゴリオ聖歌の最盛期の修道士・修道女らが聖歌テキスト、すなわち聖書をどのように理解し、彼らの聖書解釈はどのような仕方です聖歌演奏に反映されていたのかという問いである。

2. 研究の目的

しかしながら、より包括的にこの「祈りの

芸術」に接近するためには、聖歌の「生活の座」、すなわち典礼が十分に考慮されていなければならないだろう。この領域を補うアプローチが「典礼神学」の視座である。

ここにいう典礼神学の視座とは、キリスト教典礼の究極の祝いの内容である「神の救済行為」が、グレゴリオ聖歌の個々の楽曲においてどのような神学表現をとっているかを考察する研究アプローチである。前述のとおりキリスト教典礼において中心的な役割を果たすのは聖書である。その影響は、聖務日課における詩編共唱やミサの聖書朗読配分をはじめ、本研究の課題であるグレゴリオ聖歌、奉獻文、祈願文などさまざまな典礼文に及んでいる。しかるに、その使用は典礼暦や秘跡によって規定されている。聖歌ごとの典礼上の機能が視野に入っこそ、当該聖歌のテキストならびにネウマの意義も一層明確になる。従来のグレゴリオ聖歌研究では、こうした視座からの研究はほとんど進められてこなかったと思われる。特にグレゴリオ聖歌の形成期（8～9世紀頃）の典礼神学に基づく各楽曲の分析は、本邦においては未開拓の領域である。本研究はこうした欠落を補い、成立期以降のグレゴリオ聖歌を「典礼の場における神学行為（神を語り、神と語らう行為）」としてとらえ直す新たな試みである。

3. 研究の方法

もちろん、このような研究課題のためには、目立った研究史のない本邦においては特に、基礎研究に始まる長期的な取り組みが必要となることが予想される。そこで、上記課題の解明のために必要な研究領域として、予備考察的領域から専門領域へとゆるやかに接続してゆく下記の三領域を想定した。所与の三年間に全てを見渡すことはできないとしても、三領域をあらかじめ明示しておくことは、本研究課題の方向性を見定めるためには有益と思われたためである。

三領域のうちの第一は、中世初期、特にカロリング朝以降のフランク王国における典礼および典礼音楽を歴史的に概観するという課題であり、いわば「典礼史的研究」である。ここでは、典礼の地位の比類なさをフランク王国の種々の公文書ならびに当時のキリスト教会の教会会議録そのほかによって確認したうえで、神学者たちによる典礼注解書から、当時の典礼の枠組み、とくに儀礼構造と思想的背景を読み取ることを課題とした。

第二の領域は、特定の聖歌レパートリー、具体的には待降節とその頂点としての降誕祭の聖歌群に焦点を当て、該当する聖歌テキストが—それは聖書テキストでもあるが—中世においてどのように解釈されていたかを概観する、いわば「聖書解釈史的研究」で

ある。

第三の領域は、該当聖歌（聖書）テキスト、中世の聖書解釈、テキストに付されたネウマの三者の間に何らかの関連性があるとの作業仮説に立ち、個々の楽曲の担う典礼上の機能を踏まえて、それらの聖歌の神学内容を明らかにするという試みであり、これを「典礼神学的研究」と位置づけた。

4. 研究成果

報告者は、すでに本研究課題の申請以前から、上記三課題のうち、予備考察としての「典礼史的研究」に着手しており、フランク王国における典礼史を、ボニファティウス、ピピン3世、メッツのクローデガング、そしてカール大帝らの時代に焦点を絞って史料を辿っていた。本研究は、こうした取り組みを継続するかたちで始められた。

(1) 初年度となる2010年度においては、カール大帝以降の典礼史の動向、特に聖歌集編纂史に注目し、カール大帝治世下における聖歌学校の設立やローマ教会との人的交流、さらには、記譜を伴わない聖歌最古写本の伝承とそれらの特徴の概見を試みた。その結果、いずれの局面においても、ローマの典礼実践に対しては、それがローマ司教座の権威をもって伝承されたがゆえに、フランク教会では大きな敬意が払われていたことが明らかになった。と同時に、聖歌隊員や聖歌指導者の派遣などの人的交流や聖歌写本の流布によって顕在化したローマとフランク相互の実践の間の齟齬に対し、フランク教会は、独自のリテラシーと心性に従って、ローマの実践の欠落を補い、ローマとの乖離の解消に努めていたことも明らかになった。こうしたカール大帝時代の典礼改革を支えた心性は、「正しさの希求」と表現して差し支えないだろう。この根本姿勢は、ローマ教会の正統性への恭順によって、また、ローマの実践との差異にあっては常に「正しい振舞い *recte agere*」を選択しようとする態度によって表される。秘跡書の欠落部分をローマ教皇による「割愛部分」と理解したうえであらためて補遺を付すと述べる「ハドリアヌス型グレゴリウス秘跡書」の序文（アニアヌのベネディクトゥスの作とされる）などは、そうした改革精神の表出といつてよい。

さらに、ネウマ記譜法に至るグレゴリオ聖歌の筆録の歩みから、聖歌テキストのみを記載する第一段階に着目した。この段階を示す最古層の重要な六つのミサ聖歌写本（いずれも8~9世紀）は *Dom René-Jean Hesbert* によって比較校訂されているが、特に9世紀中葉以降の写本では、カロリング期のリテラシー技術を駆使して聖歌テキストの全文を記載しようとする姿勢がみられる。中世音楽

研究者 *Susan Rankin* によれば、それまでのようにインチピットではなく、テキストの全文を記載するという、聖歌テキストに対する新しい態度に、カロリング期の典礼刷新の精神が映し出されているという。すなわち、聖歌テキストの全文掲載は、「誤りのない正しいテキスト」を伝承する意図のもとで行われたと考えられるのである。カール大帝（在位768-814年）の「文を促すことについての勅書 *Epistula de litteris colendis*」（784/5年）は、正しいテキストを得て「正しく語ること *recte loqui*」が、神に嘉される生き方、すなわち「正しく生きること *recte vivere*」に通ずると謳っている。フランク王国の宮廷に息吹いたこうした改革精神のなかで、いわゆるカロリング・ルネサンスの先駆けをなす、聖書の改訂や秘跡書の改訂増補などが次々と遂行されていったと考えられる。

(2) 2年目の2011年度においては、カール大帝の息子ルートヴィヒ敬虔王（在位814-840年）および彼の後継者たちの時代の典礼史の動向に着目した。なかでも、カロリング期の典礼改革に大きな影響を与えた816年のアーヘン教会会議の決議文書「参事会規定 *Institutio canonicorum*」、ならびに、この教会会議の影響を直接受けて執筆されたフラバヌス・マウルス（ca. 780-856年）の『聖職者の教育について *De institutione clericorum*』をとりあげ、これらの文書のなかで強調される典礼行為者、とりわけ朗読者および詩編唱者の役割についての考察を試みた。それによれば、典礼における聖書朗読や詩編唱の目的は、聴衆を「悔悛 *compunctio*」へと導くことにあるが、これは、聖書の言葉に照らされて過去の罪や現在の罪の状態を悔いるのみに留まらず、永遠の生命への焦がれをも指す。歌唱という典礼行為は、グレゴリオ聖歌の形成期においては、こうした終末論的救済論に支えられていることが明らかになった。

(3) 最終年度となった2012年度においては、それまで未着手だった「聖書解釈史的研究」にも踏み込んだ。その手始めとして、「主の降誕 日中のミサ」の入祭唱「*Puer natus est*」に焦点をあて、そのテキストであるイザヤ書9章5節に対するミラノ司教アンブロジウス（333/4-397年）の聖書解釈を追った。アンブロジウスは、中世を通して盛んに読まれたいわゆる「四大教父」（アウグスティヌス、教皇レオ1世、アンブロジウス、教皇グレゴリウス1世）のうち最も古い教父である。

もちろん、聖歌テキストが依拠する聖書と、アンブロジウスの聖書引用との間には、大きな開きがある。そこでまず、古ラテン語訳とウルガタ訳と比較することによって聖歌テ

キストの特徴を、またアンブロジウスの著作中の各引用箇所と比較によってアンブロジウスの聖書引用の特徴を把握する作業から始めた。その結果、聖歌テキスト、アンブロジウスのいずれも、聖書文言の自由な取捨選択を行うなど、かなり自由な態度で伝承と向き合っていることがわかった。

そのうえで、聖歌テキストであるイザヤ書9章5節に対するアンブロジウスの聖書解釈の理解に努めた。その結果、アンブロジウスはこの聖書箇所をキリスト論的に解釈し、キリストの受肉および十字架と結びつけて読み解いていたことが明らかになった。特に、イザヤ書9章5節の「みどり子 puer」と「子 filius」を、それぞれキリストの人性と神性のしるしと位置づけ、これらをヨハネ福音書のプロローグの「肉 caro」と「みことば Verbum」(ヨハ 1:14) に対応させる見解は、それがキリスト教的な聖書解釈原理を示す文脈で示されていること、さらには、現代にまで伝承・保持されている「主の降誕 日中のミサ」の入祭唱と福音朗読との対応関係からみても示唆に富む。というのも、「主の降誕 日中のミサ」の福音朗読は今なおヨハネ福音書のプロローグだからである(ヨハ 1:1-18)。つまり、グレゴリオ聖歌の形成期において、固有唱(ここでは入祭唱)は、典礼の場で福音朗読と関連づけられながら、ともに祝いの内容である救済秘義を解き明かし、告げ知らせ、典礼に参加する者を秘義そのものへと導く機能が与えられ、その役割を果たすべく、それぞれの固有唱に相応しいテキストが与えられ、現代にまで伝承されていると考えられるのである。

(4) 以上が、「典礼史的研究」「聖書解釈史的研究」「典礼神学的研究」の三領域を見据えつつ取り組んだ本研究の概観である。三年前を振り返れば、グレゴリオ聖歌に特化した研究としてもやや欲張りな課題設定だった感は否めない。そのため、手順を踏んだ研究ではあったが、当初目指した「個々の楽曲の担う典礼上の機能を踏まえて、それらの聖歌の神学内容を明らかにする」段階にまでは歩を進めるには至らなかった。

しかしながら、典礼史の領域においては、グレゴリオ聖歌の形成期の実情をある程度まで描写し、「正しさの希求」という当時の典礼改革の根本姿勢を浮き彫りにすることができたのではないかと思う。

また、聖書解釈史の領域においては、4世紀のミラノ司教アンブロジウスの聖書解釈に着手することができた。アンブロジウスのキリスト論的解釈が、アウグスティヌスらによって引き継がれていったのか、継承があったとすれば、そのキリスト論は聖歌テキストの音楽とどのような関連性があると認めら

れるかについては、今後さらに研究を続けてゆく必要がある。

典礼神学の領域における最大の課題として当初見込んでいたのは、グレゴリオ聖歌の各楽曲が内包するキリスト教的な救済神学の解明であった。しかしながら、本研究を進めるうち、固有唱と朗読との密接な関連性についての示唆を得ることができ、また、たとえば詩編唱(者)や朗読(者)に与えられた典礼上の機能についても新たな知見を得ることができた。

今後とも、引き続きこれら三領域を想定しつつ、「祈りの芸術 ars orandi」としてのグレゴリオ聖歌の神学の解明への歩みを辿ることにしたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

- ① 西脇純、グレゴリオ聖歌研究(5) — 「主の降誕 日中のミサ」の入祭唱「Puer natus est」の理解に寄せて一、南山神学、第36号、2013、79-100
- ② 西脇純、グレゴリオ聖歌研究(4)、南山神学、第35号、2012、111-133
- ③ 西脇純、グレゴリオ聖歌研究(3)、南山神学、第34号、2011、229-253

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西脇 純 (NISHIWAKI JUN)
南山大学・人文学部・教授
研究者番号：60329753

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし